

ギャラリー店主 田中 陽子さん(63) = 青森県十和田市



冬を越し、新葉が育つと、それを見届けたかのように古い葉が落ちる。常緑樹ユズリハの世代交代だ。「東北の手仕事を次の世代に引き継ぎたい。職人の生き方、自分の生き方をユズリハに重ねていたいと思います」。青森県十和田市の十和田湖畔にあるギャラリー「暮らしのクラフトゆずりは」店主の田中陽子さん(63)は開業時の思いをそう語る。

東北の手仕事伝える

十和田湖畔の大型ホテルの後継者だった夫と23歳で結婚。子育てしつつ必死でおかみとして切り盛りした。30歳を過ぎた頃、敷地の一角で地元の物を紹介する事業を任されたが、ありふれた土産物を売る案は進める気になれなかった。



「暮らしのクラフトゆずりは」で、塗装加工をしていない曲げわっぱを手に「杉の木肌が水分を吸い、冷えてもおいしい」と田中陽子さん(右)＝青森県十和田市

「中ぶらりん」。田中さんは当時の自身をそう表現する。「夫の家族やホテル内の複雑な人間関係の中で、自分を見失いそうだった。経済的自立でなくても、『自分の足で立っている』という実感がほしかった」そんな中、自らが「青森

に生まれ育ちながら地元でどんな物が作られているか知らないことに思い至る。手の生活や人柄に触れた。青森、秋田、岩手で「手作

300人の職人と交流
【一口メモ】「暮らしのクラフトゆずりは」は、青森県の十和田湖のほとりにある手仕事のギャラリー。1989年にオープンし、木工、漆器、陶器、籠、家具、鋳物、織物など、東北6県の職人による手仕事を中心に扱う。約300人の職人と交流を持ち、近年は国内外で展示会も開催。現代の暮らしに手仕事をどう生かせるか、提案も行っている。

りされている物」の地図を作り、3年かけて職人を訪ねた。例えば青森の「刺し子」は、木綿が育たない土地で、麻布を丈夫で暖かくしようと女性たちが刺し継いだ物という。暮らしの知恵と人々の思いが詰まった手仕事



あけびつるの籠の仕様について、田中陽子さんに相談する津軽編み作家の竹内啓子さん(右)＝青森県弘前市

1989年に開店後、全

「手仕事には、どんなに便利になっても忘れてはならないことが詰まっている。それを伝え続けていきたいのです」(第2金曜日に掲載します)

作家自身に 作品値付け
田中陽子さんの生き方や考え方が色濃くにじみ出ているのが、ギャラリー「暮らしのクラフトゆずりは」での作品の値付け。「作家自身に付けてもらう」というのは、作家さんが提示した額を販売額の6割になるようにするのを基本にしています。手仕事の素材は、自分で作ったり探したりする人がほとんど。単純に経費の積算はできません。だから『作り続けられる価格を提示してください』と伝えていきます」と田中さん。

た額を販売額の6割になるようにするのを基本にしています。手仕事の素材は、自分で作ったり探したりする人がほとんど。単純に経費の積算はできません。だから『作り続けられる価格を提示してください』と伝えていきます」と田中さん。